



Title	＜文献紹介＞キャサリン・ウォレス著：『ネットワーク・セルフ 関係、プロセス、人の同一性』
Author(s)	三富, 雄介
Citation	メタフュシカ. 2020, 51, p. 73-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78429
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《文献紹介》

キャサリン・ウォレス著

『ネットワーク・セルフ 関係、プロセス、人の同一性』

Kathleen Wallace. *The Network Self: Relation, Process, and Personal Identity*.
New York: Routledge. 2019

三富雄介

1. はじめに

本書は米ホフストラ大学哲学教授キャサリン・ウォレスの2019年の著書であり、全体を通して自己についての諸問題を論じている。本書は全7章からなっている。そのうち1章は本書全体のイントロダクションであり、続く前半の2章から4章までは主としてウォレスの提案する「累積ネットワークモデル (the cumulative network model、以下 CNM と略記する)」の理論的側面が扱われている。一方、後半の5章から7章では CNM と自律、責任などの実践的問題との関係が中心となる。ウォレスの近年の著作は、主として自己や人格の同一性¹、倫理学²に関するものであり、本書はこれまでの彼女の研究をまとめたものとも言えるだろう。

CNM では自己をさまざまな関係（生物的、心理的、社会的、文化的等々）のネットワークであり、かつ累積的なプロセスであると見なす。自己が諸関係から構成されるというこの本書の方針は、これまでも主としてフェミニストらによって試みられている³。しかしながらそこでは社会的・文化的関係ばかりが目され、形而上学的な抽象度の高い議論に対する説明力にはやや不足の感があった。本書では生物的、身体的、心理的關係といった、英語圏の形而上学において重視されている関係を自己の構成要素として導入し、形而上学的な問題の説得的な説明を可能にし

¹ Wallace, K. A. (2009). Personal Identity of an Intersectional Self. In *Self and Society*. Eds. Alexander Kremer and John Ryder. Central European Pragmatist Forum, Vol. 4; Value Inquiry Book Series, Vol. 207. New Amsterdam, NY: Rodopi Press, pp. 89-102.

² Wallace, K. A. (2011). Moral Transformation. In *Identity and Social Transformation*. Eds. Radim Sip and John Ryder. Central European Pragmatist Forum, Vol. 5; Value Inquiry Book Series, Volume 240. New Amsterdam, NY: Rodopi Press.

³ 例えば Schlechtman, Marya. (2014). *Staying Alive: Personal Identity, Practical Concerns and the Unity of a Life*. Oxford: Oxford University Press.

ている。他方、自己をプロセスであるとみなす議論は英語圏の形而上学者のうち四次元主義者らによって論じられてきた。本書は四次元主義では説明の難しかった実践の問題に対して、社会的・文化的関係や累積的なプロセスという観点を導入することで、自己に関わる実践の問題を多面的で柔軟な視座から論じる。つまり CNM は形而上学とフェミニズム（やその他の倫理的関心をもった学問領域）、それぞれの領域の優れた点を利用しつつ両者を調停する統一的枠組みである。

本稿では本書のうち 2 章から 4 章（pp. 23-113）まで、すなわち実践的な問題意識と視座を取り入れた CNM がいかにして従来の形而上学の問題に対処するかを中心的に紹介することにし、5 章から 7 章（pp. 114-209）は彼女の立場を紹介するにとどめる。

2. ネットワークとしての自己

本書 2 章のうち 1 節から 3 節まででは CNM の基本的方針が明らかにされている。

本書において「自己」とは生物的、心理的、社会的、意味論的な諸特性（traits）によって構成される相互関係的なネットワークであるとされている。ウォレスは自己をその構成要素や構成要素間の関係から切り離された実体であるという（非還元主義的な）主張を拒否する一方で、ネットワークとしての自己がより低次の構成要素に還元可能だという見方もまた拒否する。むしろ、「自己はマクロレベルのものとしての構造化された統一体（a structured unity）」（p. 25）であり、低次の構成要素だけでなくマクロな視点における統一も考慮すべきだとしている。

CNM におけるネットワークとしての自己を具体的に確認してみよう。リンジーという人物は、しかしかの遺伝子をもち、英語話者であり、母であり、哲学の教授をしている。これらはすべてリンジーを構成する特性の一部である。これらの特性は当然、互いに無関係ではありえない。英語話者であることと哲学教授であることは互いに関係している（因果関係とは限らない）。諸特性は互いに関連しあい、全体として一つの統一体をなしている。CNM では自己とはこの諸特性のネットワークの統一体として理解されるのである。

それでは、自己にまつわる諸特性のうち、どのような特性が自己を構成しており、またどのような特性は自己の構成に関わっていないのだろうか。CNM において、その区別の基準は必然的／偶然的とか内在的／外在的といったものではない。なぜなら偶然的・外在的と呼ばれるような特性（英語話者であること、体重など）が自己を構成しているからである。本書で採用される区別は強く関連した／弱く関連した（strongly relevant/weakly relevant）特性という区別である⁴。強く関連した特性は、統一（integrity）やあるものの全体の特徴を左右するのに対し、弱く関連した特性はその範囲を左右するだけである。Buchler (1990) を参照して挙げられた例では、ニューヨーク市の人口はニューヨーク市に対して強く関連した特性である一方、ニューヨーク市の人口の増減はニューヨーク市に対して弱く関連した特性である。どのような特性が強く関連した特性であるかは基本的には状況による。例えば、ある時点で駅に立っているという特性はふつうどうでもよい一時的な特性でしかないだろう。しかしながら駅で爆発があって、そのとき立っていた

⁴ ウォレスは次での説明を参照している。Buchler, Justus. (1990). *Metaphysics of Nature Complexes* (Second, expanded edition). Kathleen Wallace and Armen Marsoobian, with Robert Corrington(eds.). Albany: SUNY Press.

ために大怪我を負ってしまったのならば、ある時点に駅に立っているという特性は強く関連した特性である。

強く関連した特性のうちいくつかはその人自身であるところのネットワークの統一を維持するため存続する。何が強く関連した特性であるかが状況依存的であったように、人の存続のための十分条件であるような諸特性も人によってさまざまであるし、多くの場合、明確に決められるわけではない。

3. 累積的なプロセスとしての自己

本書2章のうち、4節は四次元主義への批判とCNMによる修正的な説明に当てられている。批判を通して、CNMにおける自己の累積的なプロセスという側面が明らかになる。

英語圏の形而上学において、物体の通時的な変化と同一性を説明する仮説として、四次元主義がある。四次元主義の主たるパリエーションとしては時間的部分のそれぞれが全体として一つの対象を構成しているという時間的部分説 (the temporal parts theory) と、三次元の各対象が四次元のパーソン・キャリア (person-career) の段階となっているという段階説 (the stage theory) とがある。CNMは物体をプロセスとみなす四次元主義の説明を部分的には受け入れる。しかしながらどちらの説でも、そこで説明される物体が自己である場合、問題がある。四次元主義では過去・現在・未来の自分は一つのプロセスはなしているものの、それぞれ互いに孤立した異なった対象ということになってしまい、一人の人間の行為や責任について説明できない⁵。それに対し、CNMは自己が通時的にさまざまな変化を被っても、つねに当の一人の自己であるという点を強調する。

本書でウォレスはチェスの比喩を用いて四次元主義に対する自説の擁護を試みる。チェスにおいてある局面のトークンとある対局における局面のトークンとは仮に局面のタイプが同じであっても、質的には同じではない。というのも後者は対局における過去の実績 (例えば戦略) をもつが、前者はもたないからである。もしもある対局におけるある手の意味を理解しようと思えば、当然その手をその対局における一局面として理解しなければならない。同様に自己の場合も、四次元主義における時間的部分ないし段階は、CNMにおけるある時点のネットワークと形式的には違いがなくても、質的な違いがある。そして自己の実践的側面を正しく理解するためには、各時点の自己がそれぞれ過去の自己の特性をもつと考えるべきなのである。また過去の自分といまの自分とが変化を通じて同一であるということは、チェスの比喩を使えば、チェスの対局において局面は次々と変化していてもすべて一つの対局における局面であるというように理解される。一人の人物は時点によって異なる特性を持つが、他方ではひとつながりのプロセスであり、CNMにおいて自己はプロセスであるとも言われる。CNMが単なるネットワークモデルではなく、「累積」ネットワークモデルと呼ばれるのも、このゆえである。

⁵ ウォレスは次の論文を参照している。Lewis, David. (1983). Survival and Identity. In David Lewis(ed.), *Philosophical Papers*. Vol. 1 (pp. 55-77). Oxford: Oxford University Press (Originally published in Amelie Rorty. *The Identities of Persons* (pp. 17-40). Berkeley: University of California Press, 1976).

自己をその時点までの過去の特性を継承する累積的なプロセスとして捉えることで、自己の通時的な変化と同一性という両面を理解することができる。ある意味では過去の自分といまの自分とは同じでない。CNM でこのことは各時点におけるその時点までの累積ネットワークがそれぞれ異なるということによって説明される。またある意味では過去の自分といまの自分とは同一人の自分である。このことは各時点におけるネットワークが時間的に重なり合って、全体として一つの累積的なプロセスであるということによって説明される。

4. 自己の同一性

本書3章では、自己の形而上学的な自己同一性(identity)に対するCNMからの説明がなされる。

自己の形而上学的な同一性には、ある時点におけるその時点での自分自身に対する関係(共時的な同一性)とある時点における別の時点での自分自身に対する関係(通時的な同一性)とがある。

自己の共時的な同一性に対しては不可識別者同一の原理をもとにある程度の説明を与えることができる。CNMにおいて、自己が持つような識別される性質とは、自己の特性である。原理的には自己の特性をすべて数え上げ、二つのネットワークがすべての特性と関係について同一であるならば、二つのネットワークは不可識別であり、共時的に同一であると言える。もちろん実際のところ、あるネットワークの特性をすべて数え上げるのはほとんど不可能であるが、二つのネットワークが同一であると主張するのに十分な諸特性(強く関連した特性の集まり)を見つけることができるとされている。

本書で問題にされているのは共時的な同一性よりも、むしろ通時的な同一性である。どの時点でも変化しないような諸性質を考えて、通時的な同一性の問題を通常の同定の問題に落とし込むことも考えられるが、人の場合にはやはり変化があるように思われる。また各時点の人物を同一性関係にあるとみなすのではなく互いによく似た(counterpart)関係にあり、それぞれの段階に重なり合いはないと考える四次元主義の方策もある。しかしこの考え方では、各時点の数だけ異なる人物が存在することになってしまう。

CNMは四次元主義の段階説が主張することを部分的には認める。すなわち、それぞれの時点の自己は同一性関係にはないという点は正しいものとして受け入れる。しかしながら、各段階は完全に分断し孤立しているわけではなく、互いに重なり合って一つのプロセス、一つの累積ネットワークをなしているとCNMは考える。自己を論理的な通時的同一性関係にはないことを認めつつも、その通時的な数的統一(numerical unity)を考慮することはやはり実践的な観点から重要である。裁判では罪を犯した人と裁判所にいる人とがつながっているとか、似ているということの問題にしているのではない。罪を犯したのはこの人かと問うているのである。

CNMでは、共時的な同一性の場合にもそうであったように、通時的に同じ自己が存続している、つまり各時点のネットワークが互いに重なり合っていると言えるために十分であるような諸特性(それらははっきりとした境界線をもたず曖昧であるとされる)だけを考える。身体、心理的能力、記憶などが本当に自己の存続のための必要条件であるかは甚だ疑問だからである。重大な身体障がいや記憶喪失を経験したとしても、その人のネットワークが一つのプロセスをなしていないと

は必ずしも言えない。たしかにそれらの経験はネットワークを大きく制限するかもしれないが、必ずしも累積ネットワークを破壊してしまうとは限らないのである。これは移住や性転換のような自己の根本的な変容（radical transformation）についても同様である。CNM では伝統的な哲学では扱われてこなかった自己の多様なあり方を扱うことができるのである。

5. 自己の融合・分裂が生じるような思考実験

本書 4 章では、自己の融合・分裂が生じるような思考実験が、CNM によればどのように解釈されるかということが説明されている。自己の融合・分裂が生じるような思考実験の問題とするところは次の問いにまとめられよう。すなわち「自己は他の自己との融合や二つないしそれ以上の自己への分裂を通して保存されるか」（p. 83）。

CNM では、二つ以上のネットワークの融合や、ネットワークの二つ以上の分裂を通じて、もとの累積ネットワークは存続できない。すなわち自己の融合や分裂が二つ以上のネットワークの間で行われている場合には、融合・分裂の前後で、人はもはや同じ自己ではありえない。他方、もしも身体の移し替えにおいて誰のものでもない身体、すなわち一つのネットワークの構成要素になっていないような身体に対して移し替えがなされたのならば、自己は存続すると考えられる。また遠隔移転を通じて、一対一の移転がなされたのならば、自己は存続すると考えられる。つまり、「二つ以上のネットワーク」間で行われるような思考実験についてだけ、CNM は自己の存続を否定するのである。

Shoemaker (1963) にあるブラウンソンの思考実験⁶のような二人の人物が融合する思考実験では、融合元の二人の生物学的・遺伝的特性は破壊されてしまい、融合後の人物はどちらのネットワークもひとつながりのプロセスとしては引き継いでいない。つまり融合後の人物は融合元のどちらとも同じ自己ではない。

分裂の生じるような思考実験として、Parfit (1986) にある遠隔転送装置を用いて、人を転送するというものがある⁷。遠隔転送装置は人の物理的な組成をコピーしたのち、もとの身体をバラバラに破壊する。そしてコピーした情報をもとに、目的地に新しい身体が生成される。一対一の転送が行われているならば、もともとのネットワークが維持されており、転送の前後で同一の自己が続いている（ブラウンソンの場合と違い、生成される人物の物理的素材は他の自己のものではないため）。しかしながら転送装置の不調のために、もとの人物が破壊されず、同時に目的地にコピーが生成された抹消線としてみよう。このとき、もとの人物とコピーの人物はともにもともとのネットワークが破壊されており、もはや転送前の人物と同じではない。

以上のように、CNM は既存の思考実験に新しい解釈を与え、形而上学的な思考実験の含意する困難や意義を明らかにする。

⁶ Shoemaker, Sydney. (1963). *Self-knowledge and Self-identity*. Ithaca: Cornell University Press.

⁷ Parfit, Derek. (1986). *Reasons and Persons*. Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press.

6. 5章から7章まで

ウォレスはCNMが自己についての十全な枠組みであるためには、自己の主体性、自律、責任を説明できなければならないと考える。自己を関係とみなす場合、意志決定をなす自己はどのように捉えられるのだろうか。CNMでは自己の主体性に関与し、自己を律する単一の自我は想定しない。自己は一人称視点の経験からなるコミュニティであって、そこに管理人は存在しない。しかしながら自己は反省を介してコミュニティを変容させていく。このことが自己の主体性を説明するのである（本書5章）。

自律に対してもCNMは自己についての一貫した見方を保持している。自律は、自分自身の選択の内容に関係しているのか否か、しばしば問題とされる。どのような内容の選択であれば自律的かということに対して客観的な基準がなければ、例えば妻が夫の望みに忠実に行動することさえ自律的であるということになってしまうかもしれない。一方で、自律に客観的な基準を設けることは、その基準がひとから自己に課せられることによって、「自分自身が」決定するという事実を脅かすかもしれない。CNMでは自律が規範的であるということ、すなわち基準を要求するということを認める。しかしその基準は自己が自らのコミュニティやその変容を通して、自らに課す基準である。つまりCNMでは自己に規範生成の能力を見出すのである（本書6章）。

責任に関しては、すでに第3章で論じられたように、自己を累積的なプロセスと見ることで、自分自身の過去の責任について説明している。他方、自己は未来に対しても責任を負う。CNMでは自己が自律して自らの行為を決定しているために、未来に対しての責任を問うことができると考える。また責任は、自分自身の行為に関してだけ問われるものではない。自分自身が所属している団体や社会の責任も問われるのである。CNMでは自己が社会的な関係から構成されているともみなしていた。団体や社会が自己の構成要素となっていることで、集団に対する責任をそこに所属する個人に対しても問うことができる（本書7章）。

7. おわりに

本書は自己をネットワークでありプロセスであると捉えることで、従来の形而上学が扱えなかった問題を扱うことに成功している。またネットワークの構成要素となりうるような関係の候補を可能なかぎり広く取ることで、従来の社会的関係としての自己という観点よりもより豊かな理論的成果を挙げている。

しかしながら本書にも問題がないわけではない。本書は自己に関する多様な問題を柔軟に扱うため、あるいは過度に抽象的な議論を弄するような事態を避けるためとはいえ、曖昧な説明に終始している箇所も見受けられる。自己が一人の自己として存続するための十分条件は、たしかに状況によって変化するだろう。にもかかわらず、どのような特性が一般的には十分条件とみなされるかということや、どのような状況において十分条件の大きな変化が生じるかといった具体的な説明は、CNMの説得力・説明力を増すためにも今後なされる必要があると思われる。

また本書の思考実験の再解釈についても興味深いものではあるが、やはり曖昧さがある。一対多の分裂・融合によって、なぜ累積ネットワークが破壊されてしまうのかという議論の根幹が十

分には説明されていないのである。特に遠隔転送装置の思考実験における一对多の分裂のケースでは、出発地に残ったオリジナルの人物がもとの自己と同一人物であると考えerことは自然であるように思われる。本書では従来の思考実験に対して、直観に反するような解釈もなされている。まさにその点が本書の価値であるからこそ、直観に反してでも本書のような解釈をとるべきだとする論拠を充実させる必要があるだろう。

(みとみゆうすけ 哲学哲学史・博士前期課程)